

## スーダンの有用植物<その7>

### タマリンドの三つの顔

タマリンド (*Tamarindus L.*) は、マメ科の常緑高木であり、平凡社の世界有用植物事典 (1989) の記載によると、アフリカ原産とされており、一属一種の単型属とある。タマリンドはスーダンで「アラデーブ」と総称されるが、有用植物として異なった顔をみせてくれる。今回は、日本ではどちらかと言えばマイナークロップと目されるタマリンドのスーダンで確認される三つの顔を記述し、その利用方法を紹介したい。

まず、タマリンドの第一の顔は、伝統的な乾物屋にならぶ定番商品としてのものである。スーダンでは、乾燥気候もあって、天日乾燥のさまざまな乾物が売られている。タマリンド鞘状の種実は、マメ類やスパイス類の各種、トマト、ハイビスカス、ショウガ、バオバブ種実など他の乾物類とともに店頭にならぶ。この乾物屋のタマリンドは、鞘が複雑にくっつきあって販売されており、最初のパッと見では、栽培植物としてのタマリンドのイメージとはまったく結びつかなかった。しかし、これがこの植物のアフリカにおけるオリジナル形態であるということなのであろう。この第一のタマリンドの使用



オリジナルのタマリンド

方法はジュース原料として、上述のバオバブ種実と同様に水に浸漬して煮出して飲まれる。かすかな甘味とあわせて酸味が感じられ爽快な清涼飲料である。ただし、この第一の顔は乾物屋の常連ではあるが、筆者の見聞範囲のスーダン東北部では栽培の実態を見たことがない。

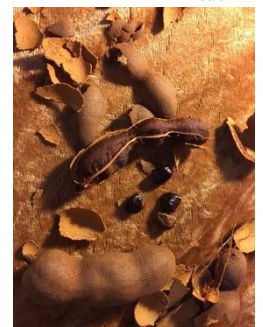
第二の顔は、村落部の農地での家畜侵入を防ぐ生垣としての栽培であり、こちらの種類は、リバーナイル州においても灌漑スキーム内での実際の植栽が見られる。同様のフェンス材としては、本シリーズで前回紹介した、マメ科のメスキートも有棘性枝があり、天然の生け垣としての利用がなされる。ただし、メスキートは、人間の管理域を

はずれ、旺盛な種子繁殖の生態から圃場内外への逸脱で周辺にはびこる危険性がある。そのため、刈り取りしたのち、茎・枝を束ねて積みあげる人工フェンスが無難な利用法となる。他方、タマリンドについては、生育・生長の速さはメスキートといっしょであるものの、植栽工程面での計算が立ち、生垣としての利用が主流である。この生垣用タマリンドも5月ごろに赤い鞘の生果をつけ、村の子供たちのおやつとなったり、季節の風物詩として生食タマリンドが市場販売されている。



生垣用のタマリンド。赤っぽく見えるのが鞘。

第三の顔は、輸入されたタマリンドである。タマリンドは、アフリカ原産のものがアジアへと伝播し、インドあたりで改良され、食用品種として発展した歴史があるらしい。この栽培植物として変身したタマリンドが、今度はスーダンに逆輸入されスーパーマーケット等において箱入りで売られている。これがスーダンで見える第三の顔である。このスーパーマーケットのタマリンドは乾物屋の第一の顔とはとても同一植物とおもえないほどの外見であり、ずいぶんと洗練された印象を受ける。



アジアから輸入の改良種

さて、生垣用の第二の顔のタマリンドも生食されるにもかかわらず、また第一と第三の顔からは、素人目からは果実の形態上で同一種であるとはただちに想起されない。しかし、ともあれ、第一から第三のすべての種子はそっくりなのである。タマリンドは、いろいろな顔をもちながらも、最終的にはめぐりめぐって分類学上の単型属なのかと納得させられる不思議な植物である。